

日本IT書紀

065 空母対空母

04 含牙篇
卷之八 重濁

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

第六十五

空母対空母

一

われわれは歴史を学ぶなかで、太平洋戦争は艦隊決戦の時代から航空機主導の時代へ転換する経過を見ることになる。二キロ、三キロを隔てて大砲を撃ち合う艦隊決戦では、砲弾の大半が無駄になる。しかも艦が沈没すれば攻撃力はゼロになってしまう。

に対して数十キロ、場合によっては百キロ以上、波濤を隔てて航空機で爆弾を運べば、命中確率は飛躍的に高くなり、結果として安くつく。戦争も経済効率で動くというところだが、そのためには索敵の技術が重要になる。最後は目視による確認であるとしても、まずはレーダーで群影をとらえ、目視した情報を電信で伝えなければならない。

イギリス空軍機がナチス・ドイツの戦艦「ピスマルク」を叩きのめして「浮かぶ廃墟」にし、大日本帝国の陸上攻撃機がイギリスの戦艦「プリンス・オブ・ウェールズ」を沈没せしめた。ここまでは目視が優先し、電波は副次的な

役割だった。

では、その航空機を艦載し、発着させる空母と空母が大海原で向かい合ったらどういうことになるか、である。世界の戦争史上、初めて行われた空母対空母の戦いとして、サンゴ海海戦は、記録に残っている。

事前に理解を促すために書くと、サンゴ海はオーストラリアの西北側に広がる海域であって、北からニューギニア島、ソロモン諸島、ニューヘブリデーズ諸島、ニューカレドニア島に囲まれている。

発端は四二年の一月二十三日、日本がソロモン諸島の北端にあるニューブリテン島を占領したことにあった。日本の大本営外軍部（軍令部）がねらったのは、アメリカ軍とオーストラリア軍の分断だった。

まず南方における連合国軍の動きを封じ込める。その上で、アメリカ太平洋艦隊と決戦してこれを殲滅し、しかるのちにハワイ上陸作戦を実施するという構想である。

そこで日本軍は、ニューブリテン島ラバウル基地に台湾から海軍航空部隊を進出させ、ここを拠点にニューギニア島南端のポートモレスビーにある連合国軍基地をしきりに空襲した。連合国軍もB-25などでラバウルを集中的に空襲し、あるいは潜水艦で日本の輸送船を攻撃するなど双方が激しい消耗戦を繰り広げた。ラバウル航空隊の奮戦が

伝説となるのはこのときの戦いである。

五月四日、日本軍がガダルカナル島の北に浮かぶツラギ島を占領して進攻の構えを見せると、アメリカ軍は空母「レキシントン」と「ヨークタウン」を出動させ、ツラギ守備隊に猛烈な空襲をかけた始めた。大日本帝国海軍はこれに対抗して空母「瑞鶴」「翔鶴」、改造空母「祥鳳」を繰り出し、八日に空母対空母の決戦が火蓋を切った。

この戦いで日本軍は「レキシントン」を沈め、「ヨークタウン」を大破させた。その代償として「祥鳳」を失い、「翔鶴」が大破した。艦船の被害からいうと、かろうじて日本軍に軍配が上がるかたちだが、損失は日本軍のほうが大きかった。

それというのは、日本軍が多くの搭乗員、戦闘員を失ったのだった。このとき被弾した空母に艦載機が着陸できず、海上に没するという状況が発生した。航空機は補充できるが、搭乗員は簡単に養成できない。

日本の軍隊では明治から一貫して「戦陣訓」というものが重視された。戦いに勝っても、個別の作戦、指揮官の判断、個々の兵士の行動というものには必ず反省すべきことがある、という考え方だった。教訓から学び、少しでも改善しようとした。

第一次大戦までの日本は、より客観的に教訓をとらえよ

うとした。だが日中戦争が泥沼化して以後、精神論に傾斜していく。

空母対空母の戦いでは、飛び立った艦載機の帰艦を確実に保証することが最も重要である。そのことに、日本軍は気がつかなかつたのではなく、分かつてはいた。しかし日本軍の航空機に搭載されていた音声無線（無線電話）は雑音が多く、ほとんど通じなかつた。

飛び立っていった攻撃機の編隊に母艦は指令できず、編隊を作っている航空機の間でも通信ができなかつた。「トン・ツー」のモール信号は使えたが、全機に搭載されていなかった。母艦と編隊はお互いに何が起こっているかを知らなかつた。

一部の艦載機には方位検出装置が搭載されていた。しかしそれも性能が悪かつた。クルシー式空三号無線帰投方位測定機がそれだ。アメリカのフェアチャイルド社が開発した製品を輸入して国産化したものだったが、十年以上前の古い技術から前進していなかつた。

このため攻撃を終えて引き返す航空編隊は、母艦の所在地を探すのに一苦労した。間違えてアメリカの空母に着艦しかつたケースもあった。

対してアメリカ海軍はそのことに気がついていて、かつ物的な対策を講じていた。まず大型空母とともに、動きが

軽俊な小型空母を量産した。ばかりでなく、後方の部隊に交換用の航空機と搭乗員を乗せた予備空母を配置していた。

また味方空母が発する誘導電波を受信できる装置を航空機に組み込んだ。さらに航空機が不時着したとき、搭乗員が海上に浮かんでいられる救命具と、その位置を知らせる信号発信装置を配布した。駆逐艦や魚雷艇などは信号を頼りに、航空機搭乗員を救出することができた。

——日本軍は人命を軽視し、アメリカ軍は重視した。

といわれる。

事実、そうだったが、仮に日本軍が人命を重視したとしても、できなかった。

このことが日本時間六月五日に行われたミッドウェー海戦につながっていく。

二

ミッドウェー海戦（連合艦隊「MI作戦」）に連合艦隊が繰り出した艦船は「すごい」の一語に尽きる。

第一機動部隊

- ・ 空母四…赤城、加賀、飛龍、蒼龍
- ・ 戦艦二…榛名、霧島

・ 重巡洋艦…利根、筑摩

・ 軽巡洋艦一…長良

・ 駆逐艦…嵐、野分、萩風、舞風、風雲、夕雲、巻雲、

秋風、磯風、浦風、浜風、谷風

・ 油槽艦八

連合艦隊本隊

・ 空母二…鳳翔、瑞鳳

・ 戦艦七…大和、長門、陸奥、伊勢、日向、扶桑、山城

・ 軽巡洋艦二…北上、大井

・ 駆逐艦二十…吹雪、白雪、初雪、叢雲、磯波、浦波、

敷波、綾波、夕風、有明、海風、江風、夕暮、

白露、時雨、天霧、朝霧、夕霧、白雲、山風

この後方に攻略部隊（戦艦二、重巡洋艦四、軽巡洋艦一、駆逐艦八、油槽艦四）、攻略部隊支援隊（重巡洋艦四、駆逐艦二、油槽艦一）、攻略部隊護衛隊（軽巡洋艦一、駆逐艦十、哨戒艇三、油槽艦一、輸送船十二）が続き、伊号潜水艦二十三、潜水母艦六などが続いていた。

十二隻の輸送船には、ミッドウェー島、ひいてはハワイに上陸する陸戦兵七千六百人が乗っていた。総兵力十万人である。真珠湾攻撃の際の日本海軍機動部隊より、はるかに規模が大きい。

乾坤一擲の大決戦は、結果を知っているわれわれからすると「丁か半か」の賭博のようにも見える。作戦がうまく当たってればアメリカ太平洋艦隊は壊滅し、ミッドウェー島は大日本帝国が占領することになっていた。しかし全く逆の結果になった。

直接の敗因は、

- ・陸用爆弾から魚雷への転換
- ・攻撃編隊の着艦か、攻撃隊の発艦か

この二つの判断ミスが重なった。帰還する日本の攻撃編隊の後ろについていったアメリカ軍攻撃編隊にとってラッキーだったのは、第一機動部隊の空母を旋回していた直掩機の燃料切れが迫っていたことだった。

連合艦隊の体勢についても、数々の敗因が指摘されている。

- ・海軍軍令部と連合艦隊（山本五十六）との齟齬。
- ・作戦の目的が曖昧だった。ミッドウェー島占領なのかアメリカ太平洋艦隊撃滅なのか。
- ・ミッドウェー占領後の展望がなかった。
- ・南雲部隊の意思統一ができていなかった。

・第一機動部隊と連合艦隊本隊は三百キロ以上も離れて航行していた。艦隊本隊が戦いに参加していれば事態は大きく違った。

・日本の空母は板の甲板で艦内は密閉度が高かった。このため被弾すると爆風の被害が大きかった。また火災が発生したとき、可燃物を船外に破棄することが難しかった。

等々である。

——情報収集と分析能力の差が勝敗を左右した。

という指摘もある。

この海戦で、日本の第一機動部隊はアメリカ空母艦隊の居場所を見つけるのに無駄な時間を費やした。四方八方に飛ばした索敵機に依存するほかなかった。この海戦では、索敵機がアメリカ艦隊を発見していたが、無線の電波出力が弱かったために正確な情報を伝達できなかった。

アメリカ軍も同じように索敵機を飛ばしたが、日本軍と決定的に違ったのは、同時に無線通信とレーダーを活用したことだった。

索敵機は何も発見できなかったが、追尾する潜水艦が日本艦隊の位置を逐一報告し、ミッドウェー島基地のレーダーが日本の連合艦隊空母群の所在を探り当て、さらに攻撃

機を電波で誘導して戦果を拡大した。

三

日本海軍の空母群は、ミッドウエー島攻撃隊からの「第二次攻撃隊ノ要アリ」という報告を受けて、甲板に並んだ攻撃機の爆装を艦船用から陸上用に転換した。さらに利根四番機からの報告「敵ハソノ後方ニ空母ラシキモノ一隻を伴ウ」を受けて、甲板上の航空機の爆装を再び艦船用に転換しようとした。

そこに、第一次攻撃隊が帰ってきた。

南雲は予定通り第一次攻撃隊の収容を優先し、それが終わった。第一次攻撃隊を収容してから第二次攻撃隊を発艦させても遅くはない。このため今度は甲板上の航空機を再収用する作業が始まった。

その判断が空母決戦のタイミングを逸した。このとき、日本の第一次攻撃隊のあとを追ってきた敵航空隊が日本艦隊の上空に到着した。

空母は帰艦機を収容しているときか発艦させているときが最も弱い。甲板を大きく広げているだけでなく、高射砲や煙幕などを打ち上げることができない。アメリカ軍航空

機はそのタイミングをねらって奇襲をかけるかたちになった。

日本の空母三隻への命中弾は二発ないし四発だったので、通常の爆弾であれば各艦とも中破か大破の被害で済んだはずだった。ところが爆弾のなかに、新型爆弾が混ざっていた。落下した数秒後に起爆装置が働くのである。

これが被害を拡大した。

甲板上に並んだ攻撃機が横転し、装填しつつあった爆弾に火が移った。

投弾や機銃掃射は思うがままだった。投下した爆弾は確実に日本海軍の空母甲板に落下していった。その甲板には燃料を満載した攻撃機が整列し、爆弾や魚雷を装備していた。誘爆が被害を大きくした。

格納庫の魚雷が爆発し、「加賀」「蒼龍」は沈没、「赤城」は大破・炎上し味方の魚雷で処分された。

帰還しようとした第一次攻撃隊の約百機は、着艦すべき空母が大破または沈没してしまったため、燃料切れで次々に海中に墜落した。

このときやや北に離れていたために無傷だった空母「飛龍」は、搭乗員を救助すべきだった。だが第二航空司令・山口少将はそれを後回しにした。

午前十時五十分、独断で発令した。

「全機今ヨリ発進、敵空母ヲ殲滅セントス」

飛龍から発艦した攻撃機は二十四機だった。この攻撃隊の第一波はアメリカ空母上空を援護していた戦闘機を振り切つて、ヨークタウンに三発の命中弾を与え大破させた。第二波はヨークタウンに魚雷二発を命中させ、巡洋艦一隻にも損害を与えた。

その間、山口は上空にとどまっていた赤城、加賀所属の残存機十五機を回収し最後の攻撃を準備した。

そこにエンタープライズから発進した急降下爆撃機十三機が来襲した。飛龍の上空を守る戦闘機は一機もなかった。アメリカ軍機は楽々と投弾し、四発の命中弾を加えた。

爆弾四発が艦橋付近に命中し、発生した火災が全艦に広がった。「飛龍」に対して行われたアメリカ軍の攻撃は、最終的に航空機百十五機、魚雷二十六本、爆弾七十発に達したという。

午後五時十分、沈没。

日本海軍は「赤城」「加賀」「蒼龍」「飛龍」の空母四隻、重巡「三隈」、艦載機三百二十一機および、三千五百人の人員を失った。アメリカ海軍の損失は空母「ヨークタウン」、重巡「ハンマン」、艦載機百五十機、人員三百七人だった。

日本軍の常勝に歯止めがかかった瞬間だった。

四

この戦いを大本営は次のように発表した。

東太平洋全海域に作戦中の帝国海軍部隊は六月四日、アリューシャン列島の敵拠点ダッチハーバー並びに同列島一帯を急襲し四日、五日、両日に互り反復之を攻撃せり、一方同五日洋心の敵根拠地ミッドウエーに対し猛烈なる強襲を敢行すると共に、同方面に増援中の米國艦隊を捕捉猛攻を加え敵海上及航空兵力並に重要軍事施設に甚大なる損害を与えたり、更に同七日以後陸軍部隊と緊密なる協同の下にアリューシャン列島の諸要点を攻略し目下尚作戦続行中なり、現在までに判明せる戦果左のごとし。

一、ミッドウエー方面。

(イ) 米航空母艦エンタープライズ型一隻及ホーネット型一隻撃沈。

(ロ) 彼我上空に於いて撃沈せる飛行機約百二十機。

(ハ) 重要軍事施設爆破。

二、ダッチハーバー方面。

(イ) 撃沈せる飛行機十四機。

(ロ) 大型輸送船一隻撃沈。

(ハ) 重油槽群二ヶ所、大格納庫一棟爆破炎上。

三、本作戦における我が方損害。

(イ) 航空母艦一隻喪失、同一隻大破、巡洋艦一隻大破。

(ロ) 未帰還飛行機三十五機。

当時、軍事専門家は次のように指摘した。

「大和以下の戦艦が十一隻も随行していながら、空母群と三百マイルも離れたところを航行していた。これでは空母決戦となったとき、いかに全速力で駆けつけても敵空母群を砲撃することは不可能ではないか」

「戦艦艦隊は自らが標的となつて敵空母艦載機を引き寄せ、重装備の火砲で応戦しつつ、その間ながら空きとなつた無防備の敵空母群を叩くという戦術がなぜ取れなかつたか」

だが日本帝国海軍は十分な能力を持つレーダーを備えていなかった。ゆえにそれができなかった。

連合艦隊は翌日の昼間攻撃を検討したが、アメリカ艦隊は早々に退避して戦場を離脱していた。索敵機では捕捉できないために、追撃を諦めざるを得なかつた。

これに対してアメリカは次のように戦果を評価した。

——空母二ないし三を撃沈破、他の一ないし二空母を大破せしめたものと見られる。

六月六日、アメリカ太平洋艦隊指令長官ニミッツは次のようなコメントを発表した。

「真珠湾の復讐は、一部成就された。しかし、完全な復讐は、日本海軍が無能力になるまでは達成されないだろう。その方向に向かって、われわれは重要な前進をした。われわれはいまや、目標のなかば（ミッドウエー）に達したといつても、それは認められるだろう」

補注

戦陣訓 明治期に西洋流軍隊制度が導入されるのと同時に移入された考え方で、戦いに勝ったあとでも味方の勝因と敵の敗因を分析し次の作戦に活かすことを指していた。ところが一九四一年、陸軍大臣東条英機の名で全軍に示された『戦陣訓』は、「生きて虜囚の辱(はずかしめ)を受けず、死して罪禍の汚名を残すこと勿れ」など、全将兵に死を強制する役割を果たした。併せて「戦陣訓の歌」も作られた。生きて捕虜になった者やその家族は「非国民」と非難された。

ポートモレスビー ニューギニア島の東南に伸びた半島のほぼ中央、オーストラリア側にある。日本軍にとってはオーストラリアに上陸する橋頭堡、連合国軍にとつてはルソン島↓台湾島↓沖縄↓九州と反攻・北上する起点として重要な位置にあった。日本軍のラバウル航空隊、ブーゲンビル島占領、サンゴ海海戦などはすべてポートモレスビー攻略のための作戦だったが、サンゴ海海戦の勝利と引替えにポートモレスビー攻略の意味が見失われた。山本五十六の死が太平洋戦争における日本海軍の戦略を狂わせた。

ラバウル航空隊 日本軍はガダルカナル島を抑え、さらに南進してオーストラリアに上陸する構想を持っていた。このためガダルカナル島北西のニューブリテン島、ブーゲンビル島に航空基地を建設して連合国軍に圧力をかけた。ニューブリテン島東端にあった航空基地がラバウルである。ここには台湾航空隊の零戦部隊が進駐し、ニューギニア島のポートモレスビーに連日の猛攻撃をかけた。

連合国軍はラバウルに向けてB-25の編隊を繰り出して反撃した。それによって、一九四四年の時点では日本軍の航空機はほとんど破壊され、航空基地としての機能を失った。基地の整備兵たちはそれでも零戦の残骸をかき集め、複座式の偵察用零戦を二機組み立てた。そのうちの一機が一九七二年八月、ラバウルの沖合い十キロの海底から引き揚げられ、これが国立科学博物館に保存されている。

フェアチャイルド社 Fairchild: 一九二〇年二月、シャーマン・フェアチャイルド (Sherman Mills Fairchild / 1896 ~ 1971) が設立したフェアチャイルド・エアリアル・カメラ・コーポレーションを前身とする航空機用精密機材メーカー。第二次大戦後、シリコンバレーの起点となるフェアチャイルド・セミコンダクター社の出資元でもある。ジョージ・フェアチャイルド (George Winthrop Fairchild / 1854 ~ 1924) は一九一五年から二四年までコンピュータイング・タービュレーターイング・レコーディング (CTR のちIBM) 社の会長を務めた。

ミッドウエー海戦 (一九四二年六月五・六日) 文頭の数字は時刻を示す。

六月五日

〇四三〇 赤城、加賀、飛竜、蒼竜からミッドウエー島攻撃のため百八機が発艦。

巡洋艦「利根」から索敵機七機が発進

〇五三四 アメリカ軍飛行艇「PB Y5」日本軍機動部隊を発見

〇六〇三 PB Y5 飛行艇からアメリカ太平洋艦隊に報告「敵空

母二隻、戦艦数隻、ミッドウエーの三二〇度、一八〇マイル。針路一三五度、速力二五ノット」

〇六三〇 ミッドウエー島攻撃隊が島守備隊と交戦開始

〇七〇〇 ミッドウエー島攻撃隊より報告「第二次攻撃隊ノ要アリ」

〇七一〇 アメリカ軍雷撃機十機が日本機動部隊を攻撃(九機撃墜)

機動部隊司令長官・南雲中将より発令「第二次攻撃隊本日実施。待機攻撃隊爆装ニ換エ」

〇七五五 アメリカ軍急降下爆撃機十六機が「飛龍」を攻撃(八機撃墜)

〇八〇〇 利根四番機から報告「敵ラシキモノ十隻見ユ、ミッドウエーヨリノ方位一〇度、二四〇マイル、針路一五〇度、速力二〇(ノット)以上」

南雲中将より利根四番機に返電「敵艦種を知らセ」

利根四番機「敵兵力ハ巡洋艦五隻、駆逐艦五隻ナリ」

利根四番機「敵ハソノ後方ニ空母ラシキモノ一隻を伴ウ」

〇八三〇 利根四番機「サラニ敵巡洋艦ラシキモノ二隻見ユ。ミッドウエーヨリノ方位八度、一五〇マイル、敵針一五〇度、速力二〇ノット」

南雲中将から山本連合艦隊長官に打電「敵航空母艦一、巡洋艦五、駆逐艦五、ミッドウエーノ一〇度、二四〇マイルニ認め、コレニ向ウ」

空母「飛龍」山口二航空司令から意見具申「直チニ攻撃隊発進ノ要アリト認め」

南雲中将、山口少将に返電「揚収終レバ一旦北ニ向ウ

「筑摩」から利根四番機応援の索敵機が発進

〇九〇七 第八戦隊司令官阿部少将より利根四番機に打電「筑摩機来ルマデ接触セヨ。長波幅射セヨ」

〇九二五 利根四番機「ワレ燃料不足、接触ヲ止メ帰投ス」

〇九三五 第八戦隊司令官阿部少将から利根四番機に打電「一〇〇マデマテ」

〇九三八 利根四番機「ワレ出来ズ」

〇九三九 第八戦隊司令官阿部少将から利根四番機に打電「一〇〇マデマテ」

〇九四一 利根四番機「ワレ出来ズ」

〇九五五 駆逐艦「嵐」が米潜水艦ノーチラスを雷撃

一〇〇〇 「ホーネット」発艦の雷撃機四十一機が機動部隊を攻撃(三十五機を撃墜)

一〇二〇 南雲中将より発令「第二次攻撃隊、準備出来次第発艦セヨ」

一〇二四 空母「赤城」艦上スピーカー「発艦はじめ」

一〇二六 アメリカ軍機が急降下し投弾開始

一〇四四 空母「蒼龍」が被弾

一〇四五 空母「蒼龍」総員退去

一〇〇〇 空母「飛龍」から第一波攻撃隊が発艦

一〇二〇 「飛龍」発艦の第一波攻撃隊がアメリカ軍空母「エンタープライズ」を攻撃

一〇三〇 「エンタープライズ」に火災が発生

一〇三〇 第一機動部隊司令官・南雲中将が軽巡洋艦「長良」に

一〇三三 移乗

一〇三三 空母「加賀」総員退去

一七三〇 アメリカ軍「ヨークタウン」発艦の爆撃隊、「エンタ

ープライズ」発艦の攻撃機が「飛龍」を爆撃

一九一三 空母「蒼龍」沈没

一九二五 空母「赤城」総員退去

空母「加賀」が大爆発を起こし沈没

六月五日

〇二三〇 空母「飛龍」総員退去

駆逐艦「卷雲」が「飛龍」に魚雷を発射

〇六一五 空母「飛龍」沈没

日本IT書紀 065 空母対空母

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会
<http://www.ossaj.org/>
info@ossaj.org

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。